

日本常民文化研究所附設博物館構想について

内田 青蔵

新しいキャンパス構想

本学の創設 100 年に向けて、キャンパスマスタープランが作成され、現在、その基本方針に沿って様々な計画が進行し始めています。新しい将来構想に基づく大学のビジョンは、以下のように言われています。

海により開かれ、世界との接点となった横浜に生まれた本学園は、多様な価値観の共存する時代に、人の交流と文化の「融和」、知識と実践の「循環」、教育と研究の「融合」による 21 世紀における「真の実学」を実現し、地域社会そして地域規模の課題を解決する、世界を惹きつけ、世界に発信する学園を目指します。

こうしたビジョンを具体化したキャンパスの未来像として、「メディアテークキャンパス」の創出が謳われています。この「メディアテークキャンパス」とは、キャンパスの主人公である学生たちの生活の場をキャンパスに創出することを目指すもので、これまでのように学習の場を、単に講義室に求めるだけでなく、キャンパスの様々な場所や施設を、学生たちの自主的な学習空間や活動空間として位置づけ、オープンスペースはもちろんのこと、多様な情報を提供する施設や魅力的な環境の場とすることを意味します。



写真 1 キャンパス中央に大学の“知”の象徴として図書館が中央に置かれている

換言すれば、かつての大学は、“知”の象徴として図書館を重視し、例えばアメリカの 3 代目の大統領となるトーマス・ジェファースンの創出したバージニア大学に象徴されるように、キャンパスはロトンダをモデルとした図書館を中心に配置計画が考えられていました（写真 1）。今回提案されている「メディアテークキャンパス」では、こうした図書館だけではなく、学生が利用する様々な諸施設にも、学生を刺激しながらその学習を支援するための情報や環境を提供することが求められるのです。

日本常民文化研究所附設博物館構想について

さて、こうした「メディアテークキャンパス」構想の中で、学生を刺激する重要な施設として博物館創設の構想が重要課題として出現してきました。同時に、新キャンパスへの改修にあたっての諸施設建築の建て替え構想も必然的動きとして沸き起こりました。

そうした中で、新キャンパスへの改修とともに開学 100 年の歴史性を如何にキャンパスとして維持し表現していくのかという問題も重要課題として議論されたのです。その中で、現 6 号館（図 1・写真 2）は、戦後の大学創設時の図書館であり、また、中庭の正面に位置するなどかつてのキャンパスの象徴的建築でもあったことを踏まえ、建物を保存し、かつ、新キャンパスの重要施設としての博物館に転用する構想が生まれたのでした。そしてまた、その博物館こそ、学生はもとより、日本、そして、世界に情報発信できる日本常民文化研究所の附設博物館がふさわしいという意見の一致を見たのでした。

改めて、将来構想を振り返ると、「人の交流と文化の『融和』、知識と実践の『循環』、教育と研究の『融合』による 21 世紀における『実学』を実現」というフレーズは、そのまま日本常民文化研究所、さらには、非文字資料研究センター・国際常民文化研究機構という附置組織を含め、実践している内容そのものを指しています。新しいキャンパスにふさわしい博物館の情報収集のために、他大学の博物館の視察などを行ってきましたが、今後は、具体的にどのような博物館を構想し、学生たちにはどのような情報提供をしていくのかを定めていく時期を迎えました。新キャンパスにふさわしい博物館のイメージについて、皆様からもアドバイスをいただきながら、実現に向けての活動を積極的に進めていきたいと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

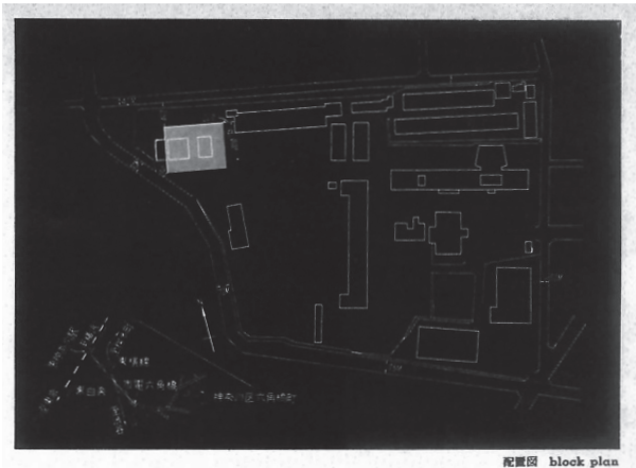


図 1 1958 年当時のキャンパス配置図

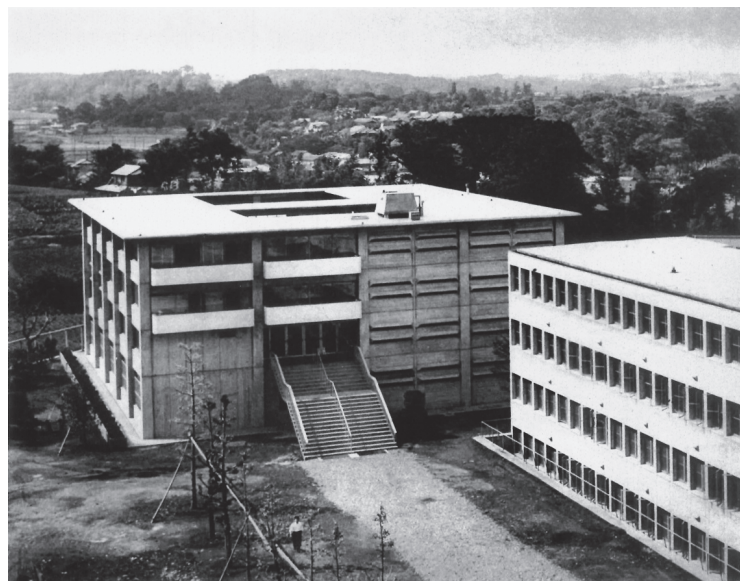


写真 2 1958 年竣工当時の現 6 号館（旧図書館）